

## 乳幼児を連れた学会参加の課題と今後への提案

星野 由子

秀明大学

---

### 概要

本論は、乳幼児を連れて学会に参加した筆者の経験に基づき、子連れ学会参加にはどのような方法があるのか、そして子供を連れて学会に参加せざるを得ない研究者に関して、学会運営者にどのような配慮をしてもらえると助かるのかを論じたものである。

**Keywords:** 子連れ, 託児所, 学会運営

---

### 1. はじめに

小さな子供を持つ親にとって、学会に行くことは様々な困難がある場合が多い。特に女性にとっては、法令で定められた産前産後休暇<sup>1</sup>の間はもちろんのこと、産前休暇に入る前であっても妊娠中に長距離を移動して遠くの学会に行くことは難しい。また、産後休暇の後には育児休業<sup>2</sup>で仕事を休むことも多く、また育児休業を取らない場合にも男親女親ともに子供が小さい時には学会に参加するのは困難が伴うことが多い。理由の1つとして、学会は通常休日に行われることにある。成田 (n.d.) は以下のように述べている。

「研究者が家庭における育児の主たる担当者である場合、通常休日に開催される学会に参加することは容易でない。(中略) 研究者の配偶者が育児の主たる担当者でもある場合も、たまの休日に一銭も家計を利さない学会に参加することは、配偶者の理解を得がたいところがある。」

しかしながら、学会に行くことは研究者であり続けようと思う者にとっては避けて通れない道である。研究公表のパターンとして、酒井 (2016) は図 1 のように 4 つを提案しているが、このうち 3 つのパターンで口頭発表が含まれている。つまり、学会や研究会に出向いて研究成果を発表することは研究者にとって必要不可欠である。

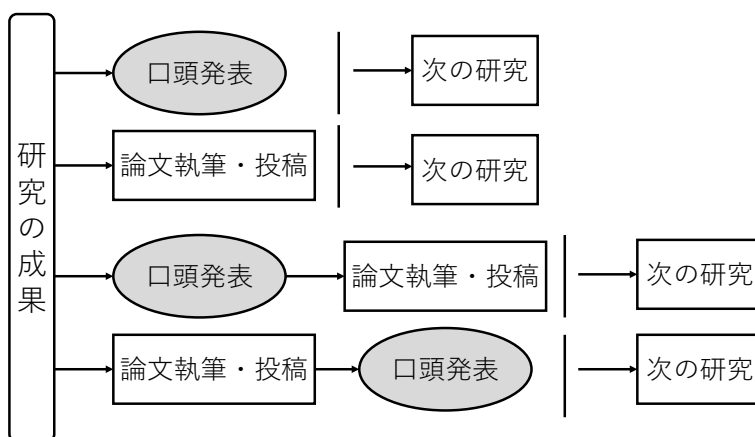


図1. 研究公表のパターン (酒井, 2016, p. 180 を一部改変)

特に乳幼児を持つ親が学会に参加する際には、学会開催中に誰がその子供の世話をするのかを考えなければならない。学会は自宅の近隣で必ずしも開催されるとは限らないため、宿泊を伴うことも多い。その場合まず初めに決定しなければならないことは、子供を学会に連れていくのか、それとも誰かに預けて自分一人だけ学会に行くのかということである。子を預けるに足るほど信頼した人が学会開催中に確保できる条件は限られている。配偶者が健康でありその学会開催中に仕事や特別な用事がない場合には配偶者に預けて行くことが最良の選択であろう。ただし、子供が生後1年未満で主な栄養摂取方法が母乳である場合には、母親が子供を父親に託すためには、子供を哺乳瓶にあらかじめ慣れさせておくことや、搾乳をしておく、父親が粉ミルクの作り方に慣れておくなどの準備が必要となる。また、個人差はあるが、子供が生後1年を超えていても、その子供が研究者である親から極度に離れたがらない場合や、その親が寝かしつけないと子供が寝ないという場合もある。更には、信頼して預けられる人がいたとしても、乳幼児を数日預けるということは預け先の人に相当な負担を強いることとなるため、簡単に頼めることではない。以上を考えると、子供を学会に連れていくという選択肢を選ばざるを得ないこともあるだろう。次のセクションでは、子供を連れて学会に参加することについて、筆者の経験にも言及しながら記していく。

## 2. 子連れ学会参加<sup>3</sup>

子供を学会に連れていく方法は3種類ある。1つ目は、子供を学会が運営もしくは委託する託児所に預ける方法である。2つ目は、学会開催地に大人も一緒に付随してついてもらい、学会開催中はその大人に子供を預けておく方法である。3つ目は、子供を学会会場に連れてくる方法である。

### 2.1 託児所に預ける方法

託児所に預ける方法は、託児所が開設されている学会であれば最も簡単な方法であろう。託児所を学会が運営している場合には、学会会場内に託児所を設営している場合が多いため、学会会場に子供を連れてきて託児所に預ければ、託児所が開設している時間内であれば、子供のことをあまり気にすることなく学会に参加できる。

ただし、金銭面での問題は否めない。学会によって託児所にかかる費用は様々であり、全額を学会が負担しているところもあるが、多くの場合には何らかの費用を託児所使用者が支払うが必要になる。表 1 は、大阪教育大学の橋本健一先生がまとめてくださった、言語学等の学会が開設している託児所についてのデータである。学会により、無料のところから 1 時間あたり 1000 円程度かかるところまで様々である。

学会名	対象年齢	定員	費用	最大費用
日本言語学会	0 歳～9 歳	N/A	500 円/時間	1.5 日 約 5,000 円
社会言語科学会	N/A	N/A	N/A	5000 円×2 日
日本発達心理学会	0 歳～小学生	N/A	1,000 円/3.5 時間	3 日約 8,000 円
日本認知言語学会	0 歳～小学生	最小 2 組	800 円/時間 (0 歳+200 円)	2 日 12,800 円～
日本音声学会	0 歳～12 歳	N/A	500 円/時間	2 日約 8,000 円
日本社会心理学会	2 ヶ月～12 歳	N/A	1,000 円/1 日	2 日 2,000 円
情報処理学会	3 ヶ月～就学前	6 名	1,000 円/半日	3 日 6,000 円
日本中国語学会	3 ヶ月～小学生	N/A	1,000 円/時間	2 日 17,000 円
日本教育工学学会	0 歳～	N/A	無料	無料
日本ハンドセラピィ学会	0 歳～就学前	10 名	300 円～500 円/時間	1.5 日 5,000 円
アジア整形学会	0 歳～就学前	10 名	600 円/時間 (2 人目以降半額)	2 日 9,600 円
電子情報通信学会	産休明け～小学 3 年生	10 名程度	300 円/時間 (0 歳児は 500 円)	4 日 10,200 円～

表 1 託児所データ (2016 年 3 月現在)

この託児所の費用に研究費や出張費を使えることはまずない。山形大学は学会出張時の保育支援制度を設けており、1 人 1 回 1 万円を上限として託児やベビーシッターの利用料金を補助しているが、多くの大学ではまだこのような制度は設けられていない。筆者が 2015 年に全国英語教育学会熊本研究大会において託児所を使用した際には、当時 3 歳

の息子と 1 歳の娘を朝から夕方まで丸 1 日預けて計 12,000 円であり、これは私費で支払った。

また、学会内の託児所は未就学児を対象としていることも多い。その場合、小学生は託児所に預けることができないため、託児所を使うという選択肢は選べなくなる。2 人以上子供がいて、上の子は就学しているが下の子は未就学児である場合には困ることになるかもしれない。また、大会の前後に合わせて会議が開催されることもあるが、その場合には会議開催中にも託児所が開設されているのかを確認しておく必要がある。

## 2.2 一緒についてきてもらった大人に預ける方法

学会が開催される土地まで誰か大人について来てもらって、学会期間中はその大人に子供を見てもらうという方法もある。この際ついて来てもらう大人は、配偶者もしくは子供にとっての祖父母の場合が多いであろう。学会開催地が観光地である場合には、家族旅行も兼ねて学会に参加することができ、また常日頃から子供の世話をしている人と一緒にいることは、子供にとってもストレスが少ない方法であろう。更には、すべての学会で託児所が開設されている訳ではないため、託児所が開設されない学会に参加する場合には、この方法を取らざるを得ない場合もある。

しかし、子供の世話をするとといっても、土地勘のない場所で子供の世話をすることはかなりの労力を要する。宿泊するホテルにずっと閉じこもっているわけにもいかず、子供が飽きないような場所に連れていくという工夫もしなければならない。もちろん子供の食事のことも考えなければならない。筆者がこの方法を使用した時には、その土地にある支援センターのそばにホテルを予約し、子供にとっての祖母に、支援センターに子供を連れていってもらったこともある。慣れない土地の中で、天候が悪い場合の事なども考慮しつつ子供を見てもらうことをお膳立てしておくのは時間も労力も必要である。

## 2.3 学会会場に連れてくる方法

規模が比較的小さい学会や研究会であれば、出席するメンバーさえ許可すれば学会会場自体に子供を連れてくるという選択肢もある。保育士等がいるわけではないので常に誰かが子供のことを見ていなければならないが、特に子供が乳児の場合には、親にとっては不安が少ない方法の 1 つである。筆者は LET メソドロジー研究部会に 2 回子供を連れて参加したことがあるが、2 回とも歓迎して受け入れていただいた。

学会会場に連れてくる場合には、別室に子供用の部屋がある場合は別として、子供を静かにさせておく必要がある。また、子供がうるさくし始めてしまった場合には、すぐに会場を出て子供の機嫌を直したり、隠し持って来たオヤツを食べさせて静かにさせる、音の出ないおもちゃやタブレットにダウンロードしてきたアプリケーションで遊ばせてご機嫌を取る、などの工夫が必要である。また、学会は大学で開催されることが多いが、日本

の大学にはオムツ替えスペースや授乳室は無いと思って臨まなければならない。

### 3. なぜ学会に行くのか

ここまでをまとめると、子育て期真っ最中の研究者にとって、学会に行くという事、特に宿泊を伴う学会に行くという事自体に大きな困難があるということである。子供を連れて学会に行くことで、宿泊先もビジネスホテルのシングルルームではなく、子供も一緒に寝ることができる広い部屋を予約する必要がある<sup>4</sup>。子供がハイハイや歩き始めの頃であれば和室を予約することがより望ましいため、宿泊先の選択肢も狭まる。宿泊費だけを考えても、単身で学会参加するよりも遥かに費用がかかる。交通費のことももちろん考えなければならない。新幹線の自由席であれば未就学児は無料であるが、飛行機であれば国際線は2歳から、国内線は3歳から座席を取らなければならない。誰か大人についてきてもらう場合には、その大人の分の交通費ももちろん捻出しなければならず、これらは当然のことながら私費を用いる。このような様々な難関を乗り越えてでも学会に参加したい、もしくは学会に参加しなければならないのはなぜであろうか。

研究者になろうと思った人が運良く就職できたとしても、最初の就職から希望のところに居ることはまれである。更新不可な任期があったり、待遇に難があったりと、その理由は様々ではあるが、早めに職場を移りたい、もしくは移らなければならない状況に置かれることが多く、そのためにも業績を出し続ける必要がある。ただし、このタイミングは、女性にとっては出産や育児のタイミングと重なる。運良く産前産後休暇や育児休暇でさえも取得できる職場だとしても、出産後なるべく早く業績を出すために研究を継続する必要がある（ただし、筆者の経験では妊娠中でさえ、事前の想定よりも頭が働かない上に、新生児や乳児を育てていると脳が「研究モード」にならず、「研究モード」に脳を戻すリカバリーにはかなり時間がかかる）。このような中でもなんとか研究を続けてきたためその成果を発表したい、という気持ちで学会に参加する人も多いのではないだろうか。

ただし、このタイミングで研究者でいることを諦めてしまう女性がいることも事実だと思われる。図 1 は、平成 24 年における大学教員の分野別女性割合である。工学以外では助手における女性の割合は半数を超えているが、助教・講師・准教授・教授になると家政学以外は女性が半数を超えるものはない。つまり、助手にまではなれるものの、女性が研究者であり続けようとするところには困難が立ちはだかっていると言える。これには様々な理由が考えられるが、出産・育児もこの原因の一つになっているに違いない。小さい子供を持つ研究者にとっても参加しやすい学会を運営することは、分野全体の底上げにもなるであろう。

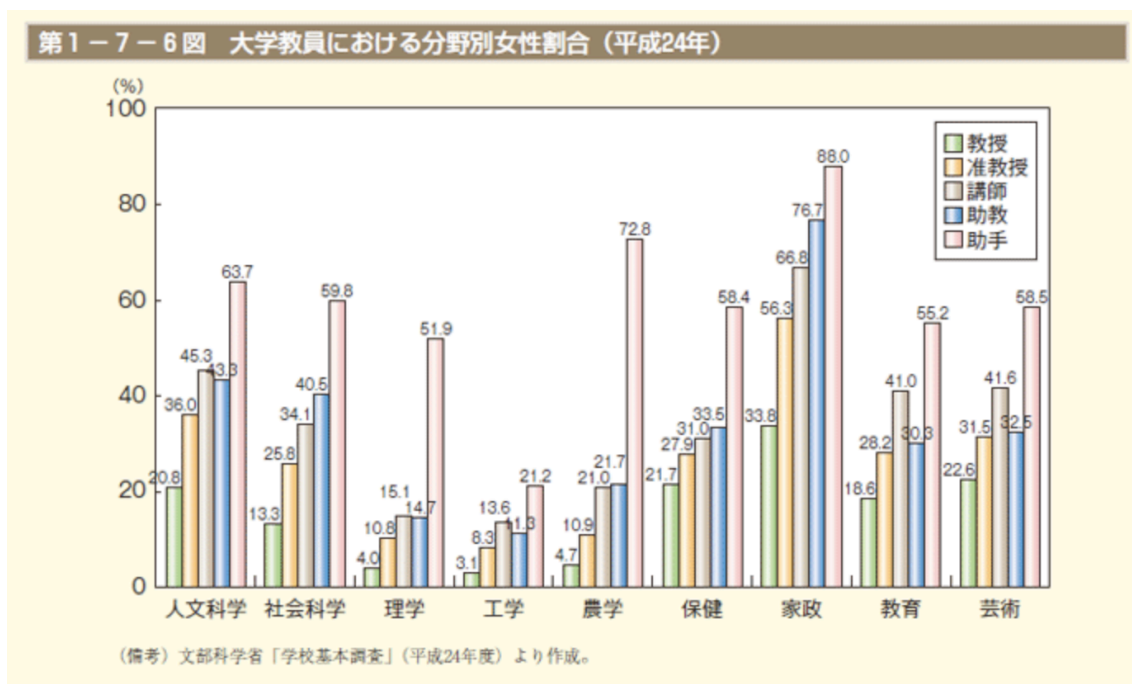


図 1. 平成 24 年度の大学教員における分野別女性割合

#### 4. 今後への提案

託児所を必要とする研究者の割合は常に小さく、常にマイノリティである。日本物理学会 (2010) と田代 (2013) でも以下のように述べられている。

「利用者がある限り準備は常にしておく必要があるのではと。結果として申し込みがなかった大会もありましたが。(中略) 少子化ですから子供関係のものはそういう意味では全部先細りですよ」(日本物理学会, 2010)

「子育て真っ盛りで、しかも託児利用を必要とする会員は、全体から見れば今はまだ、決して多くないかもしれませんが。しかしこのような状況であるからこそ、学会が主体となって、大きな温かい目で支援を続けていただくことが、我々マイノリティにとって大きな支えになっています」(田代, 2013)

つまり、託児所を必要とする人の数は少ないためにせつかく準備をしても開設しないこともあるが、託児所があること、そして子供を受け入れてくれるという雰囲気自体が子育て世代を支えているということである。研究者人生のうちで託児所を必要とする時期はほんのわずかであるが、そのわずかな時期を支える仕組みを作ることが重要なのではないだろうか。ただし、利用者があるかどうかわからない託児所を準備することは、学会運営者にとっては大きな負担となる。特に、規模が小さい学会や研究会では、毎回託児所を設置す

ることは現実的ではない。そのため、託児所を設置する以外の方法で子育て世代の研究者も学会に参加しやすくなる仕組みを作ることも必要であろう。これに基づき、以下を提案する。

- (1) 大会のウェブサイト等に、「子供を連れて学会に参加して良い」ということを明記する。
- (2) 発表者にも「口頭発表を行う部屋に小さい子供がいるかもしれない」ということを事前に周知しておく。もしくは、2 部屋以上で並行して口頭発表が行われる場合には、子供を連れて行っても良い部屋を作る。
- (3) 乳幼児のために空き部屋を用意し、オムツ替えや授乳ができるようにする。空き部屋は 2 部屋確保し、1 部屋は授乳のための女性専用の部屋にできると望ましい。<sup>5</sup> オムツ替え等のためにレジャーシートやフロアマットが部分的に敷かれているとなお良い。
- (4) 乳幼児から高校生までは学会参加料を無料とする。また、学会に参加せず子供の世話のために一緒に来た配偶者も参加料を無料とする。
- (5) 必要に応じて、懇親会への子供の参加も許可する。
- (6) 上記のことを継続して行う。

6 の、「継続して行う」というのは、そもそも今までは研究者のみの団体だった学会や研究会に子供を連れて来て良いことを周知するには時間が必要であるため、一回の学会や研究会に誰も子供を連れてこなかったからと言って、この取り組みをやめるべきではないということを意味している。上記で述べたとおり、子供を連れて学会に参加せざるを得ない期間はあまり長くないし、幼い子供を持つ研究者全員が学会に子供を連れて参加せざるを得ないわけではない。そのため、ちょうどその学会や研究会の開催時には、子供を連れて来なければならないというニーズがたまたま無かったのかもしれない。継続的に「子供を受け入れる」という雰囲気を作ることを提言したい。そして、将来的にはウェブサイト等に「子供を連れて参加してよい」と書かなくても、子供を連れて学会や研究会に参加できるような雰囲気が作れると良いと思う。

最後になるが、研究者としてマイノリティであるのは乳幼児がいる人たちだけではない。可能な限り様々な境遇の人を受け入れるという寛容さが、社会にも学会にも求められるであろう。

## 注

1. 産前産後休暇とは、労働基準法第六十五条に示されているもので、六週間以内に出産する予定の女性が休業を請求した場合と、産後八週間を経過しない女性を就業させてはならないという法律である。
2. 平成 29 年 1 月 1 日施行の育児・介護休業法によると、子供の 1 歳の誕生日の前日まで

の間で労働者が申し出た期間育児休業をとることができる。

3. 乳幼児を学会が開催される土地まで連れてくること自体にも困難を要する。荷物は倍増し、「移動中に発表準備をする」ということは現実的に不可能となる。
4. 洋室の場合には、子供が落ちないようにベッドガードがあるホテルを探す必要があるかもしれない。
5. 学園祭が開催される時には様々な来場者を見越してオムツ替えスペースや授乳室を設置している大学も多いと思われるので、これらを設置するのは難しいことではないであろう。ただし、授乳室に関しては授乳ケープを持参してもらえるようにすれば、確保しておくのは 1 部屋だけでも構わないであろう。

## 参考文献

- 成田健太郎. (n.d.). 「もうひとつの学会デビュー戦」. Retrieved from [u-parl.lib.u-tokyo.ac.jp/archives/japanese/blog27](http://u-parl.lib.u-tokyo.ac.jp/archives/japanese/blog27)
- 日本物理学会. (2010). 「座談会：物理学会託児室この 10 年」. 日本物理学会誌. 66, 380-385.
- 酒井英樹. (2016). 「研究成果の公表方法」. 『はじめての英語教育研究-押さえておきたいコツとポイント』 (pp. 177-204), 研究社.
- 田代むつみ. (2013). 「子連れ学会参加のススメ ～学会託児に感謝～」. 地盤工学会誌, 61, 11.